

ヘレニズム村落の構造を探る

—エジプト・イドゥク湖沿岸コーム・アル＝ディバーウ遺跡の考古学調査(2023)—

長谷川 奏 早稲田大学・東日本国際大学客員教授
西本 真一 日本工業大学建築学科教授
小岩 正樹 早稲田大学建築学科准教授
西坂 朗子 東日本国際大学客員教授

Searching for Site Structure of Hellenistic Village Site: Archaeological Excavations at Kom al-Diba', Waterfront of Lake Idku, Egypt (2023)

HASEGAWA, So (Dr.)/ Visiting Professor, Waseda University and Higashi Nippon International University
NISHIMOTO, Shin-ichi (Dr.)/ Professor, Department of Architecture, Nippon Institute of Technology
KOIWA, Masaki (Dr.)/ Associate Professor, Department of Architecture, Waseda University
NISHISAKA, Akiko Visiting Professor, Higashinippon International University

ヘレニズム村落の構造を探る—エジプト・イドゥク湖沿岸コーム・アル＝ディバーウ遺跡の考古学調査(2023)—

1. 西方デルタ地域の研究史

エジプト西方デルタ調査隊は、現在、エジプト西方デルタの潟湖(イドゥク湖)のほとりでヘレニズム時代の村落調査を進めている(図1)。この地域は、第26王朝が建設したギリシア人の交易都市ナウクラティスと、地中海沿岸の海運を一手に担ったカノプスとを結ぶナイル支流が走っていた場にも近く、同王朝の強い影響下にあったと推測される。アレクサンドリアが建設されてからは、当該地は首都圏に近接した場として、外来政権が地域権力を掌握する過程での最初期の重要拠点であったと思われる。伝統的なヘレニズム古典考古学では、低地はその生産性の低さから重要性が見過ごされてきた地域であるが¹、近年では各国隊の調査が進み、アレクサンドリアの後背地全体の歴史像が変わりつつある。

2. 研究対象地域の自然環境

エジプトの地中海沿岸では、前5000年頃の海進により塩基性土壌が残されて、集約的な麦作が困難な場となった。当該地の地理的な特徴を見ると、南北軸(VW)では海洋～砂丘～潟湖～緑地と続く偏差の大きな環境の場が活動の舞台となり、一方、平坦な平野が続く東西軸(XY)の地勢は生活文化の型が一様に拡散する場となったと思われる。民俗誌を総合すると、これらの地域の潟湖民は、塩分に強い作物栽培(ゴマ、

ウリ等)、漁業(海水域ではボラ、サヨリ、淡水域ではナイルバーチ、コイ、ナマズ等)や野鳥の捕獲(ウズラ、

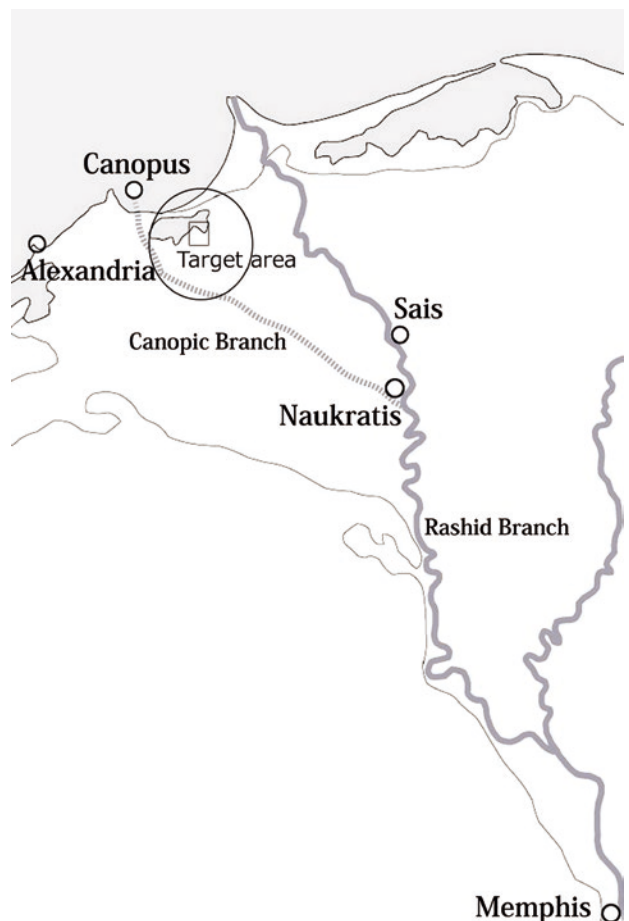


図1 西方デルタの主要遺跡と研究対象地域

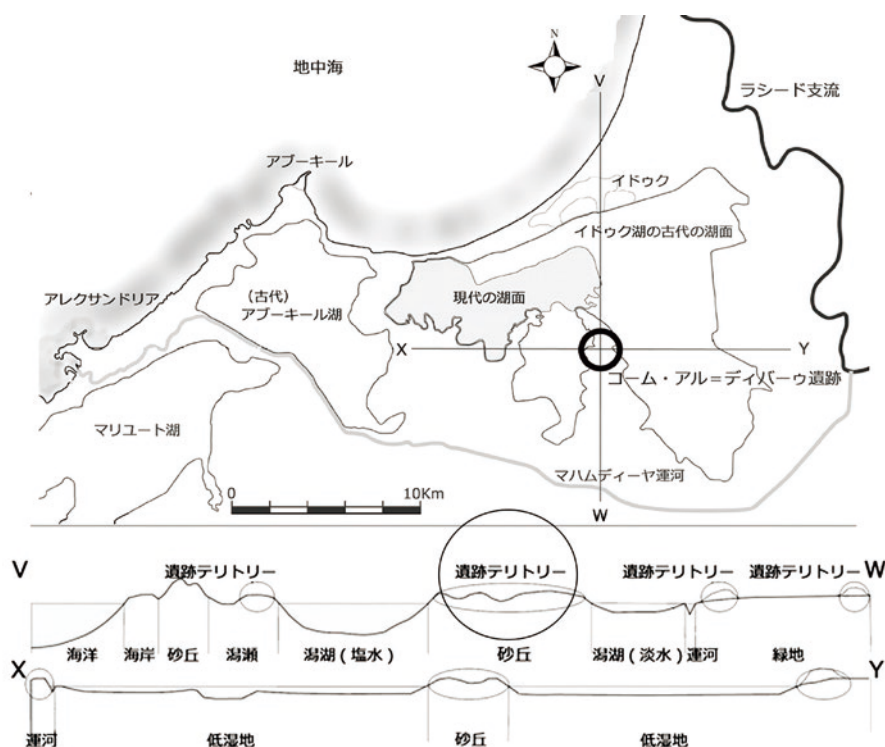


図2 研究対象地域の地理的特徴

サギ等)、葦織り等の製造業等、脆弱な生業を取り結んだ生業複合を営んだと推測される(図2)。当該地域に広く分布する砂丘の頂部に形成された集落が上記のような経済活動の拠点となったであろうが、それらの大部分が近代の開発で失われた。研究対象の遺跡も、そうした砂丘集落の一つである。2003年に英国隊が研究対象遺跡のごく簡単な地表面観察を行ったが、基本的に未調査の遺跡であった²。

3. 遺跡における分布調査の成果

コーム・アル＝ディバーウ遺跡は南北二つの丘からなり、集落遺跡と思われる南丘陵は6haを測り、丘の頂部は麓から10mほどの標高差を測る。微地形測量の後、磁気探査(GRAD601を使用)を行ったところ、南丘陵の頂部では、ヘレニズム時代に建造されたと推測される祭祀施設ナオス(Naos)を中心に形成された神殿周域住居(Temple Precinct)が捕捉された³(図3)。探査画像は、日乾煉瓦住居が密集した集落を示していると思われ、さらに家屋・竈等の施設・家畜小屋・倉庫・広場・街路等が含まれていると考えられる。集落は丘の南～西側に集中しており、概ね東西方向よりやや傾く規則的な軸線を有す。さらに丘陵の北部には、内側に矩形の施設をもつ方形の大規模遺構も判読された。地表面に分布する遺物(ローマンランプ、東方シ

ガラータ土器、アンフォリコス等)の年代から、集落の最も活発な活動時期は、ローマ時代(後1～3世紀)にあると推測され、その後北丘陵の探査成果も取り入れて、遺跡の復元図も作成された(図4)。このように、対象遺跡の構造のおおよそが探査によって把握されたことから、発掘調査に移行する運びになった。発掘調査は、2023年8月5日～9月4日の間に行われた(図16～18)。

4. 発掘調査(2023)の成果

発掘に際しては、50m四方の大グリッドをまず設営し、それをさらに25の10m四方のグリッドに分割した。このうち、2023年の調査区域の対象としたのは、D3b1、2、6、7、11、12、D3c5、10、15の計9グリッドであった(図5)。表層の堆積層は薄く、深いところでも20～30cm程度であり、これらを除去すると、日乾煉瓦造建造物の基礎部分と建造物の床面(あるいは生活面 Dakka)が現れた。

【遺構】

このたび発掘区域から確認された遺構は、おおよそナオスとその周壁でみられた煉瓦規格(36cm×19cm)のグループで構成されており、それらは以下のような分布であると考えられた(図6)。図にみられるように、今期の発掘調査では、これまで遺跡の構成

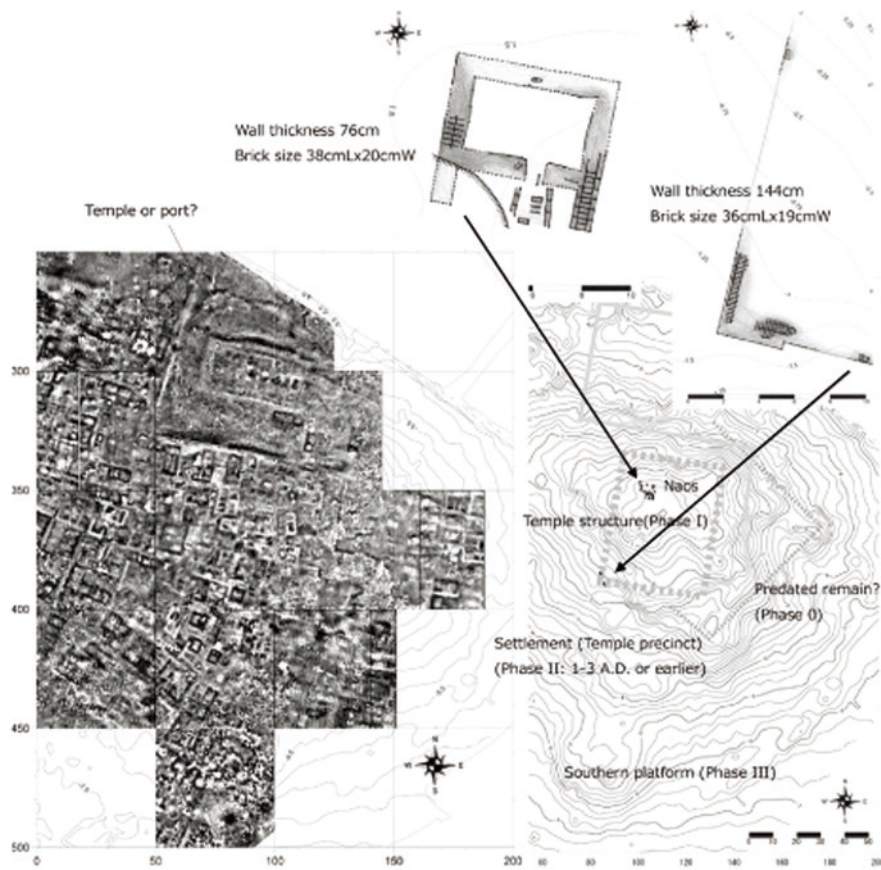


図3 磁気探査の反応図と遺構の分布

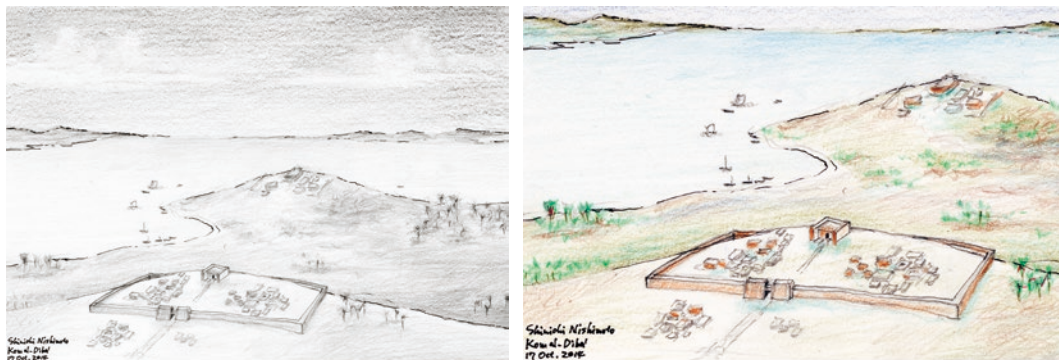


図4 コーム・アル＝ディバーウ遺跡の復元図

の中心を占めると考えられてきたナオス(図6: 遺構1、図8)の東側～東南側の構成を考える材料となったが、これらは二重壁(煉瓦4枚分の壁厚)(図6: 遺構2、3)に囲まれた中にある複雑な構成となっている。D3c15の北東コーナーでは、このたび検出された遺構がさらに東側に繋がるペイブメントもみられた(図9)。建造物の小部屋の床面には、炉の痕跡や土器等を埋め込んだ施設の痕跡もみられた(図10)。いくつかの小部屋を有するそれぞれの建物が僅かに異なる建造物の軸線は、建造物の時期差を表していると思われ、このたび

みつかった建造物はおよそ3期に分類されると推測され(図7)、さらにナオスの建造に先立つ建物(前身遺構)かとも考えられる壁体もみつき、その確認が次期発掘調査の課題となった。

【遺物】

丘陵頂部は近隣農民の作業場としても用いられてきたため、表層に含まれる遺物は攪乱されて近現代の遺物が部分的に混入するものの、そこに含まれる土器片の多くは、概ね遺跡の活動時期を反映しているものと思われた(プトレマイオス王朝期～ローマ期)。出土土

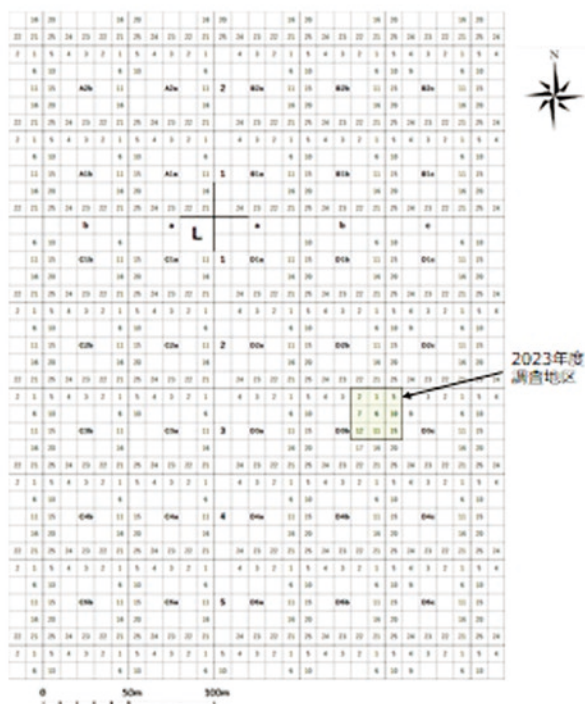


図5 グリッド設定図

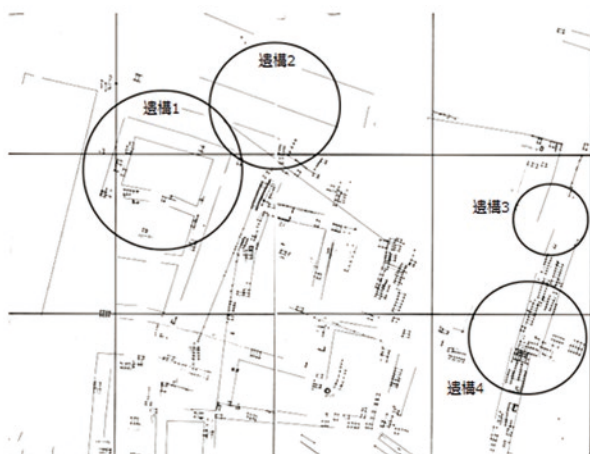


図6 プランの概要と主要な遺構部分

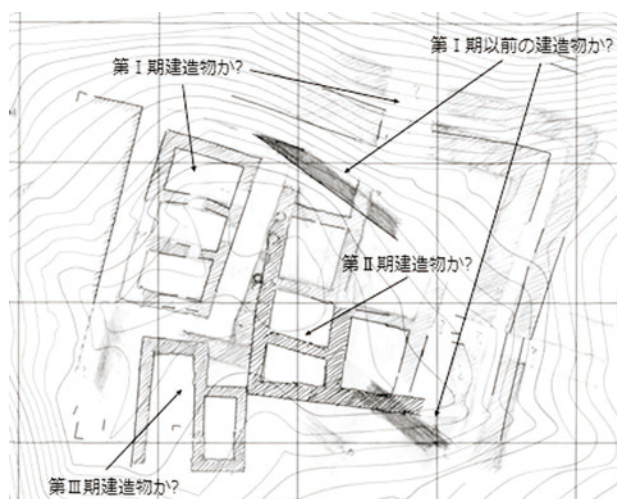


図7 推測される建造物の時期区分



図8 ナオスの祠堂周辺



図9 東側に伸びるパイプメント



図10 建造物小部屋内の施設の痕跡

器の内でも、丘陵頂部の Dakka から取り上げられたシルト・クレイの皿型土器(図11)や大型壺(胴部の中位や底部近くに穿孔があり、前面に広く開口部をもつ胴部から形成されていることから果汁等の压榨された液体を貯蔵する容器とも考えられる)(図12)は丘陵頂部の活動に深く関わる遺物と考えられる。丘陵頂部から離れた周壁遺構周辺からは、奉納用とも思われる石製容器がいくつか出土している(図13)。その他、ランプ(図14)、ブロンズの装身具、ブロンズあるいは



図 11 床面直上から出土した皿形土器



図 12 床面直上から出土した壺形土器



図 13 石製の奉納台



図 14 土製ランプ



図 15-1 コイン(表面)



図 15-2 コイン(裏面)



図 15-3 コインのモチーフ
(参考資料)



図 16 発掘現場の遠景



図 17 発掘現場の景観

鉄の釘、土製のゲーム駒等が出土している。D3b1 の表層と周壁まわりの2か所では、プトレマイオス2世のコインがみつかった(図 15-1、2、3)。既にトレンチ発掘の際に、「カドケウスの杖」の表徴をもつアンフォラ把手が出土しており、プトレマイオス王朝の初期の時代(前2世紀頃か)が想定されていたが、僅かながらも、遺跡の形成年代に関わるかと想定される年代資料が出始めていることは興味深い。

5. おわりに

ナオスの周囲の構造を解明することは、本遺跡調査



図 18 南丘陵から北丘陵を望む

の喫緊の課題となる。また二重壁構造の遺構とは一体何であるのか、という丘陵上の建築物の性格もまた解明されなければならない。従って、次期の発掘調査は、それらの解明を考えやすい調査地点設定がなされていくであろう。

＊ ＊ 本稿で使用した図面は、岡崎伸哉氏(日本工業大学大学院生)の手をお借りして作成した。

■註

- 1) Απο δε Σχεδιας αναπλευουσιν επι Μεμφιν εν δεξια μεν εισι παμπολλαι κωμαι μεχρι της Μαρειας λημνης, ων εστι και η Χαβριου κωμη καλουμενη. 「スケディアからメンフィスに向って遡行すると、右側にはマレア湖(マリユート湖)に至るまで多くの村があり、そこにはいわゆるカプリアの村がある。」 *Strab.* 17.1.23(C803) ストラボンのこの記述は、カノプス支流を船で渡る際にこの研究対象地区の近辺を通過した際に記したものだが(カプリアは現在の Abu Hummus あたりか)、北側に広がる砂丘景観は詳述されていない。
- 2) 英国隊によれば、北丘陵は王朝末期の時代層を含む可能性もあるが、中心的な年代はプトレマイオス朝後期からローマ時代を推測し、墓地か港施設があった可能性を報じている(Wilson 2012 *op. cit.* 111)。
- 3) ナオスの横幅は約 660 cm、壁厚は 76 cm で、煉瓦規格は 38 cmL×20 cmW である。ナオスは横長の部屋を南面させた一室構成であり、入口の位置は中心から若干東側にずれている。壁体の厚さも煉瓦 2 枚分で、小規模の建物としては重厚な作りである。また丘の中腹からは、煉瓦規格は 36 cmL×19 cmW の煉瓦 4 枚分の堂々とした厚みを持つ壁(144 cm)が発見され、丘の頂部のナオスを取り囲む周壁をなすと考えられた(西本他: pp.7-8)。

■参考文献

- ・ Blue, L. K. 2010 *Lake Mareotis, Reconstructing the Past: Proceedings of the International Conference on the Archaeology of the Mareotic Region held at Alexandria University, Egypt 5th-6th April 2008*, Southampton.
- ・ de Cosson, A. 1935 *Mareotis*, London.
- ・ Hairy, H. (ed.) 2009 *Du Nil à Alexandrie: Histoires d'Eaux*, Paris.
- ・ Hasegawa, S. and S. Nishimoto, "Recovering the landscape of the waterfront at Lake Idku: Archaeological survey at Kom el-Diba" eds by A. Wahby and P. Wilson, *The Delta Survey Workshop: Proceedings from Conferences held in Alexandria (2017) and Mansoura (2019)*, London, 2022/7, pp. 55-64.
- ・ Kenawi, M. 2014 *Alexandria's Hinterland*, England.
- ・ Mahmud Bay 1872 *Mémoire sur l'antique Alexandrie: Ses fauborgs et environs decouverts, par les fouilles, sondages, nivellements et autres recherches*, Copenhagen.
- ・ Toussou, O. 1934: *Atlas tārikhi: al-asfal al-'arḍ (al-wajh al-bahrī)*, al-Qāhira, 1934.
- ・ Wilson, P. and D. Grigoropoulos 2012 *The West Nile Delta Regional Survey, Beheira and Kafr el-Sheikh Provinces*, London.
- ・ Wizāra al-thaqāfa wa wizāra al-ittiṣālāt wa ma'lūmāt 2002 *Mashrū' niṣām al-ma'lūmāt al-jughrāfi: aṭlas al-muwāqī' al-āthāriya bi-muḥāfi ẓa al-Buḥaira* 3, al-Qāhira.
- ・ 恵多谷雅弘・中野良志・下田陽久・長谷川奏・エルサイド アップスザグルール 2013 「多衛星データを用いた古代エジプト遺跡 Site No.52 の発見について」『写真測量とリモートセンシング』vol.52-4、200-206 頁 日本写真測量学会。
- ・ 岸田徹・長谷川奏・津村宏臣・竹内俊貴・茂木孝太郎 「磁気探査と地中レーダー探査によるエジプト・アラブ共和国コマルディバー遺跡の調査研究」文化財科学会第 32 回大会、東京学芸大学、2015/7/11～12(ポスターセッション)。
- ・ 西本真一・長谷川奏 2015 「エジプト西方デルタ、コーム・アル＝ディバーウの建造物(1)」『日本建築学会梗概集日本建築学会』7-8 頁 日本建築学会。
- ・ 長谷川奏 2016 「地中海、砂漠とナイルの水辺のはざまで―前身伝統と対峙した外来権力の試み」水島司編『環境に挑む歴史学』308-322 頁 勉誠出版。